

映画

の中の

子ども
たち

第11回 孤独なツバメたち

～デカセギの子どもに生まれて～

—知らなかった彼らの青春、彼らの人生—

川崎 二三彦

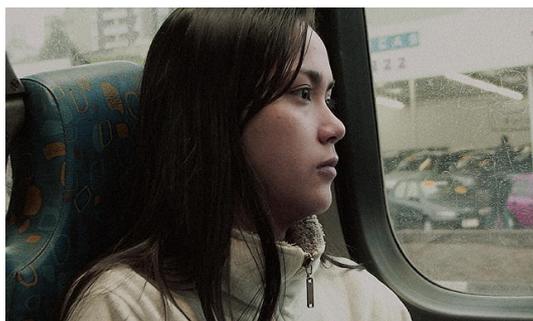
舞台挨拶

映画館に通うようになって数十年になるけれど、監督の舞台挨拶というものに出くわしたことはなかった。だから、ブラジル映画祭の初日に上映された本作品でのそれは、初体験となる。

「ブラジル移民の子孫、つまりは日系ブラジル人が、長い時を隔てて、今度は日本にデカセギに来ており、中でも浜松は、日本で最も多くのブラジル人が自動車製造関係の派遣労働者として暮らしています。映画は、彼らと共にやってきた子どもや来日後に生まれた子ども、つまりは第2世代となる若者5人を追いかけたものです。賛否はあるでしょうが、ご覧になって是非とも率直なご意見、ご感想を聞かせてください」

というようなことが上映前に語られたのだが、挨拶したのは浜松学院大学の津村公博教授。実はこの人が本作品の共同監督の一人なのである。

「なぜそんな人が映画監督を？」と疑問に思ったのだが、そもそもの出発点は、多文化教育を専門とする彼が日系ブラジル人青年の生活実態を調査すべく、土曜の夜毎、浜松市内で若者たちにインタビューを繰り返していたことに始まる。もちろん映画化なんて毛頭考えもしなかったのだが、2008年、日本人のブラジル移民百周年を機に、



この調査に同行した NHK ワールドテレビのディレクター中村真夕が、魅力的な子どもたちに惹かれて「ドキュメンタリー」を作りたいと言い出したことが、本作誕生のきっかけだ。

リーマンショック

とはいえ、彼らの生活は過酷だ。たとえばユリ。彼は10歳で来日したものの、中学時代から非行に走り、手には「Hustler」と書かれた刺青が彫られている。映画では、少年院を退院した後の彼が登場するのだが、ブラジル人ギャング団を作っていたと告白する。ただし、「別に悪いことをするためにギャングを作ったんじゃない」「表の社会で成功するのは難しいけど、裏の社会の人たちは、自分のことをリスペクトしてくれるから」という。

あるいは19歳のエドアルド。母子で来日し、日本とブラジルを行き来していたのだが、外国籍の子どもに義務教育は適用されないせいか、彼は中学を中退して働き出す。今では帰国した母と別れ、一人日本で生活しているのだが、驚いたことに、一日の仕事を終えたと、夜間にブラジル人中学生に英語を教え、自らも勉強して大学に行く夢を持っているというのだ。

ところが、撮影を始めてすぐの2008年9月、リーマンショックが起こる。ために自動車産業は大打撃を受け、浜松でも外国人派遣労働者である彼らは真っ先に失業し、窮地に陥ってしまう。

渡り鳥

15歳の少女パウラをおそう運命も例外ではない。日本で生まれ育ち、今では恋人もいて、中卒後すぐ自動車関

連工場で働いていたのだが、彼女の両親が帰国を決意するのである。

「私は恋人とずっと一緒にここに居たいけど、親の決めたことだから……」

彼女はそう話し、未踏の「祖国」ブラジルに旅立って行くのであった。

先に紹介したユリも、やはり帰国する。一方、大学入学を目指していたエドアルドは、大麻所持で起訴され、強制送還を命じられたのだが、日本に残ることを決意して雑踏の中に消えて行った。

映画のタイトルに使われた「ツバメ」は、渡り鳥のように自由と見えて、実は居場所が定まらない彼らを象徴してのことだ。

ドキュメンタリーに前もってストーリーがあるわけではないから、彼らがバタバタとブラジルに帰ってしまうことは想定外であった。そこでカメラは、彼らの帰国後の姿を追ってブラジルに渡る。映し出されたのは、たくさんの家族を支えるために働き、夜学に通うパウラであり、結婚して子どもが出来たユリ、あるいは浜松でブレイクダンスのチームを結成していたコカが、帰国後、ダンスを通じて地元の若者と交流している姿であった。

日系ブラジル人の今

上映終了後、再び登壇した津村教授に会場からいくつかの質問が出された。

「彼らのその後が気になります。彼らは今どうしているんでしょう？」

こう尋ねたのは、なるほど「私も当事者の一人です」と自己紹介した女性であった。



教授は、「取材した5人のうち、4人もが帰国するとは思ってもみなかった」と話しつつ、その後の彼らの様子を丁寧に説明した。彼は研究者として調査するだけでなく、現在も彼ら若者と交流し、日系ブラジル人中学生に対する支援活動も続けているのである。

次に発言したのは、やはり少し年配の日系ブラジル人。この男性は岐阜県在住だが、映画が京都で上映されると知って、わざわざやって来たのであった。

「大変すばらしい作品だった。日本で大きく成功した人もいるけれど、一方でこういう現実があることを、日本人もブラジル人も、もっと知るべきだと思う」

こんな発言に応じて、津村教授は次のように話す。

「この映画は、なるべくメッセージ性を薄めて青春群像として観てもらおうよう意図しましたが、リーマンショック後に策定された『日系人離職者に対する帰国支援事業』は、手切れ金のようにして本人に30万円、扶養家族1人当たり20万円を支給するだけで、支給を受けた人は『当分の間』再入国が認められません。だから……」

暗に日本政府の政策を批判していたが、過酷な状況にもかかわらず、決して日本のことを悪く言わない彼ら若者たちへの冷静かつ熱い思いが伝わる発言であり、また、映画であった。

* 2011 / 日本・ブラジル

* 鑑賞データ 2012/10/20 京都シネマ

* 公式HP <http://lonelyswallows.com/>

* Twitter への投稿 <http://coco.to/movie/18909>

<これまでの連載>

- 第1回「プレシャス」 <http://bit.ly/9qGWXm>
- 第2回「クロッシング」 <http://bit.ly/rYwUnO>
- 第3回「冬の小鳥」 <http://bit.ly/eGJ1d9>
- 第4回「その街のこども」 <http://bit.ly/hzhB9t>
- 第5回「八日目の蟬」 <http://bit.ly/keXFwL>
- 第6回「いのちの子ども」 <http://bit.ly/pm8V0p>
- 第7回「ラビット・ホール」 <http://bit.ly/wF8G4a>
- 第8回「サラの鍵」 <http://bit.ly/HI2MsL>
- 第9回「少年と自転車」 <http://bit.ly/LXzFK4>
- 第10回「オレンジと太陽」 <http://bit.ly/QtU4sl>